

発行日
令和3年12月28日
編集・発行
春日井市道風記念館
春日井市松河戸町5-9-3
電話 0568-82-6110

道風記念館だより

第61号

とうふう
道風

春日井市道風記念館 開館40周年記念式典・講演会



記念式典、伊藤太市長あいさつ



中村立強氏講演「書のまち春日井」



会場のようす

「道風記念館開館四十周年記念式典・講演会

開館から四十年を数える道風記念館において、令和三年十月二十三日（土）、記念式典と講演会を開催しました。当初は九月に開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期になったものでした。徹底した感染防止対策が必要な状況のなか、御来賓の方々やご来館の皆様から温かいお祝いのお言葉と、更なる書道文化発展のための激励のお言葉をいただきました。

記念講演会は、開催中の企画展「書のまち春日井」に関連づけた内容で、道風記念館運営協議会会長の中村立強氏にご講演いただきました。『麒麟抄』、『塩尻』、『小野朝臣遺跡碑』等の小野道風誕生伝説が記された資料の紹介や、先人たちの道風顕彰活動について詳しくお話しいただきました。また書の学習の方法や永字八法をはじめとした書法の基礎知識など、幅広い話に聴講者は聞き入り、たいへん貴重な機会となりました。

「書之美、書の価値」とつたえるということ」記念講演会(要旨)

◇開催日 令和3年10月2日(土) ◇場所 道風記念館2階展示室兼会議室

◆講演会1(要旨)

中国における書文化の生成

福田 哲之氏

今回の特別展のテーマとの関連から、中国において書という独自の文化が、どのように生成したかについて考えてみたい。

書の文化の特色として、

- ①書かれた文字の美的価値を重んじる。
 - ②書を能くすることをもって称される能書家が登場する。
 - ③能書家の筆跡を鑑賞したり、お手本として学んだりする。
- という三点が挙げられる。



文字を美しく整えて書こうとする意識は、恐らく文字創成の初期の段階から存在したと思われるが、三つの特色を備えた書の文化が、明瞭な形で文献資料に現れてくるのは、漢代以降、とくに後

漢の頃からである。

まず、書の文化が生成する以前の状況について、文字の学習、つまり「習字」という行為に注目したい。習字の実物は、すでに現存最古の漢字資料である殷代の甲骨文に見え、漢代の木簡などにも多見される。一方、文献資料からは、文書をつかさどる史官養成のための識字教科書が、周代に存在し、秦・漢においても相次いで作成されたことが知られる。

これらの資料によれば、漢代以前における漢字は主として政治(まつりごと)のための道具として用いられていたと考えられる。例えば漢代の文献には、書にたくみな人物をたたえる評語として「史書を能くす」という表現が散見されるが、「史書」とは公文書の作成にたずさわる史官が用いる書(書体)を指している。

こうした状況に対して、書文化生成の要因の一つになったと思われるのが、紙の普及である。書写材料としての紙は、後漢の元興元年(一〇五)、蔡倫による紙(蔡侯紙)の献上を契機として広く普及し、それまで用いられていた竹簡・木簡にかわって紙が書写材料の中心的な位置を占めるに至ったとされる。ただし、竹簡・木簡から紙への変化は一律ではなく、文書の性格や用途に応じて段階的にゆるやかに進行し、各種の文書のうち文字情報だけの書物と手紙がもっとも早い段階で紙

へかわったことが指摘されている。

ここで注意されるのは、ちょうどその頃、貴族や官人たちの間で、手紙(私信)を媒体とした草書の流行が見られることである。その具体的な状況をつたえるのが、後漢後期の趙壹が著した「非草書」(『法書要録』巻一)である。

「非草書」は当時の草書の流行を非難した内容をもつが、その中には、人々が能書家として知られた張芝の草書を恋慕い、張芝の手紙を写して同好の士と鑑賞したり、それらを集めて手本集を編み、寝食を忘れて草書の練習に励んだりする様子が活写されている。ここには先に示した三つの特色を認めることができ、当時、書の文化が明瞭な形で存在したことが知られる。

趙壹は、非公式な書体である草書がいくら上手に書けても何の役にも立たないとし、当時の風潮を厳しく批判する。そこには「公」への奉仕を第一義とする立場が端的に示されているが、それを逆にとらえれば、草書の流行は「公」と対極にある「私」の尊重を基盤とするものであったと言える。

ここであらためて、草書流行の媒体が「私」の象徴とも言える手紙(私信)であったことに注目したい。いくら能書家の手紙であっても、内容面からすれば、受信者以外の他者にとって無意味な存在である。にもかかわらず、それを鑑賞し熱心に学ぶのは、内容とは別次元の筆跡そのものの美に感動するからにほかならない。「非草書」がつたえるのは、まさに書の文化を享受する人々の姿であり、内容の伝達という次元をこえた書のもつ独自の価値を、ここに見いだすことができる。

(ふくだてつゆき 島根大学教授)

◆講演会2 (要旨)

「書之美」「書の価値」を考える

古谷 稔 氏



書の鑑賞の方法にはいくつかある

が、書体別にみていくのも有効な方法である。今回の展示品にも、楷書（伝聖武天皇筆賢愚経断簡（大聖武等）、行草書（空海筆金剛般若経開題断簡、藤原佐理筆国申文帖（女車帖）、小野道風筆絹地切（紅線巻）等）、仮名（藤原伊房筆藍紙本万葉集切、伝紀貫之筆高野切等）、漢字仮名交じり（烏丸光広筆書状等）など、さまざまな書体の名品がある。

【展示品紹介（一例）】

○藤原佐理筆国申文帖（女車帖）

藤原佐理は非常に伝統を大切にしたり、小野道風の書をしつかり学んだところからスタートしている。日本書道史上最古の詩懐紙である藤原佐理筆詩懐紙をみると、若くして道風の書を学んだことが見て取れ、手のひら一つ分余白をおいてからタイトルを書くなどという懐紙の書式をきっちりとして守っている。道風が始めた和様の書をうけ、また王羲之の書を学び、独特の草書を展開した。平安時代を代表する草書の名手である。

国申文帖は、離洛帖とともに詫び状であり、自分の思いを自由自在に書き連ねた名品である。

○小野道風筆絹地切（紅線巻）

絹本に白氏文集を書いたもの。白楽天の詩は平安時代の貴族に非常に好まれたため、誰かに請われて道風が書いたものと思われる。後世、茶道の隆盛とともに切断され、掛け軸にされた。

○一休宗純筆大燈国師上堂語

特に最後の「昇」字のずつと長く引かれた最終画をみてもらいたい。一休ならではの破格の個性を主張した書である。しかし、この書をみれば、一休も基本を通じてきているということがわかる巧みな書である。

○藤原伊房筆藍紙本万葉集切

うつくしい藍色の紙に『万葉集』が万葉仮名と平仮名で書かれている。『万葉集』は奈良時代では万葉仮名のみで書写されたが、平安時代にはすでに万葉仮名は解説困難な文字となっていた。平安中期、村上天皇の命で万葉仮名に平仮名のよみが加えられるようになったのである。

「高野切」第二種と同筆の「桂本万葉集」のほか、元暦校本・金沢本・天治本を加えた、平安の五大万葉の一つと数えられる。

書体別にみる方法の他にも、素紙、染紙、唐紙等さまざまな料紙別に鑑賞する方法、写経、仮名古筆、懐紙、書状というように書式別に味わう方法、また、掛け軸、卷子本、手鑑といった装丁ごとにみる方法もある。現在ほとんどの古筆が掛け軸になっているが、元の形態に思いをはせて鑑賞してもらいたいと思う。また書とともに書かれている内容も味わってもらいたい。

私たちは、長い歴史上に生まれた書を博物館や美術館等で、また、図録や教科書などの写真図版等で、目に触れる機会がある。

しかしながら、近年では、硬筆・毛筆で「書」を書くこと以上に、「文字」を打ち出す習慣が日常化しており、「書」と、記号的な「文字」との隔たりを強く感じさせる。

大陸から伝わった漢字文化に影響を受けた日本の漢字書道は、平安時代に和様漢字を確立するに至り、その一方で、和歌の隆盛によって仮名文字が一大飛躍を遂げた。漢字を借用して万葉仮名を編み出し、そこから平仮名（女手）が生まれ、実用化とともに芸術的にも精力が注がれ、仮名の美が切り開かれたのである。

このような「書之美」や「書の価値」が生まれる要因として、人から人へ、時代から時代へ「伝える」という、文化をつなげる精神性が把握できる。「書は人なり」と同時に、また「書は時代なり」ともいえるのではないだろうか。

「伝える」方法とは、「写す」こと。「書之美」の伝統を「写す」ことであり、「移す」また「映す」ことでもある。「手」で写し、「目」で受け止める作法のもとに、「伝える」というかたちが執り行われてきたのである。「伝える」方法を介して、また新たな美が芽生え、その上に「書の価値」が生まれると考えられる。

日本の書の文化は奥深い。その高い存在価値の上に、新しい書文化を生みだしていったらいい。

（ふるやみ のる 東京国立博物館名誉館員）

編集：道風記念館

■ 展覧会のご案内

館蔵品展 「文字の造形」

令和4年1月6日(木)～3月6日(日)

古代中国で誕生した漢字は、現在では大きく分けて篆書・隸書・草書・行書・楷書の五つの書体があります。また、日本では漢字をもとに平仮名、片仮名がつけられました。現代の書作品には、あらゆる書体が用いられています。それぞれの書体にはそれぞれの美しさがありますし、同じ書体でも、意匠を凝らすことによって書にはさまざまな表情が生まれます。本稿では展示品29点のうち3点をご紹介します。

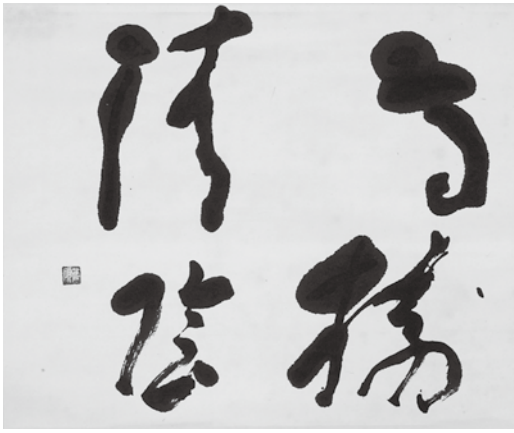


図1 藤田蒼碩



図2 石橋犀水



図3 桑原翠邦

図1、藤田蒼碩の作品には、点画の太さを墨のじみで自在に操った巧みな表現があります。「高」の第一、二画、「清」の第一、二画に注目してください。実際に筆が紙に触れた部分は画と画とが接しないように書かれています。画と画との間には余白がありません。これは墨が紙にじむ性質を活用した表現です。また、「清」の第一、三画に相当する線の太さに着目すると、二層から成るように見える線のうち、墨が濃く見える部分には大きな変化はありませんが、墨が比較的淡く見える部分には違いが見られます。運筆の速度、筆圧の強さを絶妙に操作してじみを調節し、太さに変化をつけているのです。

正方形に近い紙面に、二行二字のシンプルな構成でありながら、文字の造形に意匠を凝らして躍動感を演出しているところもみどころです。「高」「樹」では連綿を用いていないにもかかわらず、文字を傾けることによって、左に傾斜する行の流れを生み出しています。二行目「清」「陰」では「清」を縦に長く形成し、「陰」の偏と傍の間隔を狭めて尻窄まりに形づくることによって、縦方向への流れを生み出しています。

図2、石橋犀水の作品

の魅力の一つは、「監」という漢字そのものもつ字義のおもしろさです。大皿に水をはり、その上に伏せて顔をうつしみる姿で、文字の上部は大きな目をあらわしています。また、多彩な書線もみどころの一つで、筆をきわめて速く運び、かすれを伴って表現された線は、古風で素朴な字体に生き生きとしたさわやかなあじわいを添えています。

最後に図3、桑原翠邦の作品をご覧ください。隸書を書く場合、字形は扁平に書くという原則がありますが、それを脱して「気」は縦に長く書かれています。これは余白に応じて施した工夫です。左右にはらう部分で大きく横に張り出し、他字との親和を図ったのもまた意匠的です。波磔(徐々)に筆圧を加えてはらう横画)の形状は、じつに変化に富んでいます。その要素の一つは、はらい出す方向にあります。波磔の終筆部に注目すると、さまざまな方向に向かい、筆の先端部を使った軽やかなところもあれば、筆の先端部があらわれないうような重厚に表現しているところも見られます。本展では、ひとつひとつの書体に備わる魅力に、文字構成によって豊かな表情を加味した書作品をお楽しみいただけます。ぜひご覧ください。

(大矢翔太)